

Title	大学開放七つの小道具 : 産・学・官交流を中心に
Author(s)	大庭, 茂美
Citation	年次学術大会講演要旨集, 17: 326-329
Issue Date	2002-10-24
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/6724">http://hdl.handle.net/10119/6724</a>
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般論文

○大庭茂美（九州女子大）

## 〈1〉はじめに

Q1. 社会における公共資源(材)としての高等教育機関の大学が地域社会の産・学・官交流に開放(エクステンション)する状況にはどのようなものが在るか。

A1. 大学と地域社会の産業界や行政機構と相互依存と共生する対等平等を基本精神とするパートナーシップの形状や局面の関係から、次のように二分して7項目で説明できる。そこで、次に7つのアスペクト(Aspects/局面)を問うこととする。

I. 内部からの発信 ①入り口のシラバスと出口の②授業評価(フィードバック)③教員プロフィール(受講者便宜)と④研究者総覧(学内外にスタッフ紹介)利用者観点から教員調書(文部科学省の許可・認可や人事に必要)以外に上記二種類がある。

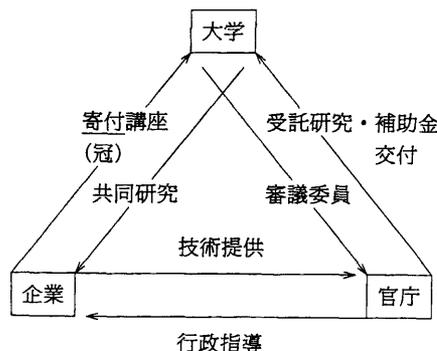
II. 外部への招待 ⑤公開講座(学科教員主導・学部教授会主導・生涯学習センター等の運営委員主導)や⑥卒業生へのアフターケア・リカレント研修やホーム・カミングプログラム誘致 ⑦研究活動や運動及び文化活動のための施設設備の公開や開放

Q2. 大学開放の目的は何か。(Why, For What)

A2. 国庫補助金(税金の還元)に対する社会的会計・説明責任(アカウンタビリティ)の一環でレストしていたり、余裕のあるソフトやハードの機能設備の地域社会への開放サービス。大学の効用(The utility of the university)を消費者・利用市民への報告アピール。基礎的研究で社会に貢献を果たす。

Q3. 提供者や利用者からみて開放にはどんな開放タイプがあるか。(How)

- (A)城門びらきタイプ …… 学外の利用者に内部を公開する発想
- (B)観音びらきタイプ …… 学外の視点から外部と一緒に内部に分け入る解体に止まらず出前の発想
- (C)車庫シャッタータイプ …… 内外双方からカーテンを捲る発想
- (D)引き戸タイプ …… 内外双方からカーテンを負の方向に引く発想
- (E)その他タイプ …… 上半を分明け換気をするイメージなどが考えられる。



三者連携とパートナー・シップ概念図

## 〈2〉内部からの発信

①入り口のシラバスと出口の②授業評価

新入学大学生のキャンパス生活の七つ道具には、学生証・学生便覧・授業時間割一覧表・授業計画書(シラバス集/シラバイ)・教員カタログ書(プロフィール)・学生生活手帳・授業評価用紙が該当する。オールド・スチューデントや科目等履修生・研究生・単位互換の特別聴講学生にとっても、シラバスや教員プロフィール及び授業評価システムは、大切なものである。

これらの小道具類の利用上の利便性に関する学生の声(ボイス)は、学生の自治団体「学生会」や大学運営上

の「学生部委員会」などで収集され調査検討を経て、建設的に報告されねばならない。特に、『シラバス』は授業の「総合カタログ」や授業の「ロード・マップ」あるいは授業担当の教師と受講学生との「双務契約証」として、学生消費者には多重効用の貴重な情報タンクであり命綱の一つでもある。

### ③教員プロフィールと④研究者総覧

教員の背景・横顔を受講学生に情報公開する小道具として、『教員プロフィール』冊子が考えられる。授業を担当する教員の発する教育や研究や大学人としてのメッセージを豊かに知ることができる。利用対象者に着目し、大学教員情報公開の道具として『研究者総覧』もより精選される必要がある。

## (3)外部への招待や誘致

### ⑤公開講座

エックステンション・レクチャーの歴史は古い。また形式や内容にも多様なものがり、各大学いずれも個性的に展開され、市民教育に貢献し続けている。地域行政機関県・市との連携も増えている。本学では平成元年から五年まで「公開講座実行委員会方式」で、平成6年以来同年に発足した「生涯学習研究センター方式」で毎年着実な実績を上げている。また、大学のハードの施設とソフトの人材を駆使しての社会貢献は順調に進んでいる。

### ⑥卒業生へのアフターケア・リカレント研修

卒業生の生涯学習の場として、大学はアフター・ケアのサービス提供ができる。卒業生はリカレンター(帰属学生)として、インサービスのままに大学の学術的インフラ利用による自発的研修が享受でき、有機的に母校と連携して自己継続教育と後輩の在学生啓発教育の機能をも発揮している。生涯学習時代を反映して本学では、小学校・中学校・高等学校の現職教員の卒業後研修会や栄養士や管理栄養士として巣立った諸氏が年に一回は母校のキャンパスに戻り集いあって研修と懇親と情報交換の充実した研究会を開いている。

### ⑦学内施設設備の学外者への開放状況

図書館(知の宝庫)や体育館(運動競技とトレーニング)や講堂(ホール)さらに研修室(研究会・宿泊・懇親会場)などとして、未使用時間帯や期間を利用しての公開オープンが地域市民等から歓迎されている。これらのハード施設設備と連動して、指導や助言に当たれるソフトの人材資源の要望もおおいに有る。

国内のそれぞれの大学には、大学学部の構成や地域社会や環境の特性に応じて、以下に挙げられるようないろいろな施設がある。それらは、それぞれの大学人によって有機的に効率よく稼働させられ研究と教育に成果があげられており、かてて加えて地域社会に適切に開放され、地域社会の文化と学術と健康増進等に大いに貢献し続けている。

開放されている学内の諸施設の広がり(スコープ)を大区分してみるとA・B・Cの3つの群に分けられる。量の頻度についても、適宜それぞれの大学で多様であろうが、知り得る範囲で本学の様子を検討するに留めることとする。尚、本学の学校プロフィールは大学2学部(家政学部:人間生活専攻・管理栄養士専攻、文学部:人間文化学科・心理社会学科)短大4科(養護教育科・体育科・音楽科・初等教育科)の文理にわたる学科構成である。生命維持の科学の研究と教育のコンセプトで教育が行われていると論者はとらえている。

#### 【A群.学舎/教室】施設名と開放時の利用の様態を列挙してみると

- ①(一般教室) 大・中・小規模教室 各種資格試験・模擬試験・センター試験・講習会会場
- ②(会議室) 研究協議会会場 学会の役員会(理事会)会場 委員役員の打ち合わせ会場
- ③(情報処理教室) 公開講座・講習会会場
- ④(視聴覚教室) 公開講座・進学説明会・保護者説明懇談会
- ⑤(LL教室) 語学研修会

- ⑥ (調理教室) 公開講座(料理・調理講習会)・栄養士養成機関の研究連絡会
- ⑦ (書道教室) 小中高校生揮毫大会・公開講座
- ⑧ (染色実習室) 公開講座
- ⑨ (栄養・医化学教室) 研究会・栄養士養成機関の研修会場
- ⑩ (音楽教室) 公開講座・音大受験生集中ゼミ
- ⑪ (茶道教室) 公開講座・外国人来学者歓迎会・クラス茶話会・大学祭の催し

などの利用が、年間を通して週末や長期休業の夏休み・春休みに卓越して見られる。大学祭などには、これらを総動員した催しに利用の特質が見られる。

【B群. 体育・スポーツ系】文武両道の精神で、元気で逞しい大学であるほど活発で盛んな利用がなされており、次のような施設建物が対象として該当すると考えられる

- ① 体育館：公式戦・中高校生/ママさんバレー大会
- ② テニスコート：公式戦・スポーツ講座
- ③ グランド：サッカー・ラグビー・野球・ソフトボール場
- ④ トレーニング・センター：公開講座
- ⑤ ゴルフ場：練習場開放・公式試合場
- ⑥ ローボール場：公開講座
- ⑦ ダンス場：エアロビックス講習会
- ⑧ 武道場：剣道・柔道・空手・少林寺拳法・薙刀・弓道場

などが典型的な利用例である。施設設備には、耐用年数もあり新機種へのモデル・チェンジの問題もあるので、適性頻度で活発に使用し、より適切な快適な(アメニティー)使用を絶えず志向してゆきたいものである。

#### 【C群. 文化・学術・芸術系】

これら施設の利用者や利用目的は極めて多様かつ具体的であり、公共共有資本として益々、地域社会へ利用の輪を広げるべきである。受益主体の学生を優先する時間帯を避けたり工夫して、時間差でフル稼働して耐用を充足させ、モデル・チェンジに迅速に対応する合理性と知恵も今後期待されるものと大いに考えられる。本学に例を採って施設等を上げてみると

- ① 多目的ホール：講演会・コンサート・演劇公演
- ② 図書館：市民への公開・講演会・展示
- ③ 食堂：大会の昼食 学会の懇親(談)会
- ④ 講堂：演劇公演・弁論大会・スピーチ大会
- ⑤ 学祖メモリアルホール：行事の折りに公開
- ⑥ 学園記念館(体育館兼講堂)：試合会場・講演等
- ⑦ 幼児保育施設(すくすくハウス)：受講者・講座参加者のための託児施設
- ⑧ 国際交流センター：海外留学斡旋
- ⑨ 生涯学習研究センター：公開市民・県民講座・リカレント講座
- ⑩ 情報処理教育研究センター：コンピューター講座

などが活発に利用されている。大学の伝統を育むアカデミック・インフラ・クラスター(房状)構造の学部と学科と専攻(コース)構成の増殖をFD・SD活動の充実に支えられて図りたいものである。

具体的に、本学のA・B・C3つの系群の利用事例や実績としては上記のものが挙げられる。ほとんどすべての施設が、年間を通じて一般の地域社会の市民に公開されている事がよく分かる。利用者ターゲットを指標として5区分してみると以下のようなになる。

- ①学校関係者・・・卒業生 在學生（本科生/科目等履修生/聴講生/特別聴講学生/研究生/委託学生/留学生）保護者
- ②研究／教育者・・・他大学教職員 諸種研究所や研究センター職員
- ③将来の学生・・・幼小中高校の児童・生徒 成人・社会人
- ④地域社会の人・・・住民・市民・県民
- ⑤行政関係者等・・・北九州市 福岡県 教育委員会 教育事務所 P T A 連絡協議会

公的補助助成金を高い割合で受けている私立大学が、国民・市民・地域住民に知的・学術的・教育的資源と人材を還元していくことは当然のことである。開かれた大学づくりに、全学の教職員は一致協力して一層邁進したいものである。

利用者・利用時期と大道具について考えてみよう。

大学の施設設備は適切に使い込まれてこそ初めて社会的意味をもつ。提供される教育サービスの消費者や享受者の学生の目からみても、また公開の機会を享受できる地域市民にとっても、大学の有する大道具・大規模装置への時間的・空間的・経費的な接近可能性（Accessibility）に支えられた保持と利用者達の快適・適切性（Amenity）が問われることとなる。利用者の立場から一覧表をまとめると以下のように多岐にわたる。

施設の充実度点検と今後の課題について考えてみよう。利用者の施設接近可能性（アクセシビリティ）や利用快適性（アメニティ）についての利用者の声（ユーザー・ボイス）点検を通して、大学の物的資源提供が自己点検評価できることは自明である。公開講座等の一部を除いて組織的なこの種の調査がなされていない事は今後の課題として受け止めたい。

ところで、B群C群でこのほかにも他大学にみられる学術研究教育資源（インフラ・ストラクチャー）がたくさんある。それらを枚挙すると、下記のものあげられる。

〔B群〕：武道場・弓道場・アーチェリー場・陸上競技場（トラック/フィールド）・プール・卓球場・バドミントンコート・乗馬場・スケートリンク・ボート場等

〔C群〕：礼拝場（教会）・生活共同組合購買部・（研究者/保護者用）レジデントハウス・教育相談室・法律相談室・健康保健（カウンセリング）相談室・博物館・地域経済学研究所・地域歴史文化研究所・郷土教育博物館・都市問題研究所・環境問題研究所・宿泊型セミナーハウス・植物園・臨海実験所・火山／気象測候観測所・同窓生／後援会会館・実習船・野外食堂等

人的資源と物的資源を有機的に結び付けてセットにして提供することが、より好ましいことである。体育関係施設や学術研究施設には、ほとんどの場合担当の教職員が管理責任者としてはもとより教育担当者として配置されている。施設の人的層を厚くして配置の充実を保証し、稼働効率と安全性を維持して施設設備を適正に運用・運営することが今後一層希求され、拡充期から内容充実に変換する時期が到来している。

#### （4）まとめ

大学が既に40年前からマルチパーシィ化（C・カー『大学の効用』1963）していく趨勢が予言されている。社会の変化に併せて、21世紀の大学の開放の在り方を切り開いて行かなければならない。情報化・国際化・少子高齢化の進む生涯学習体系下の現代社会で、「高等教育機関と市民生活との接続チャンネル」の事例を足元から点検してみたものである。個々の大学の歴史や伝統さらに立地の環境等を考慮して、大学自身の成熟に応じて着実に市民社会に貢献し、社会的説明や会計責任（アカウンタビリティ）を果たして行くように努力する事が今後の課題である。アメニティ（居心地）に富んだ機会利用可能性（アクセシビリティ）の高い国際社会に求められるインフラとして、人の住む星・地球世界が栄えたときに盛んな競争力のある大学群がそこにあったとの評価を歴史に刻みたいものである。